

本田一成著『主婦パート 最大の非正規雇用』集英社新書（2010年）

昨今、雇用問題に関しては、派遣切りや学卒者の就職難などがクローズアップされ、いわゆる主婦パートについては、マスコミで取り上げられる機会はほとんどなかった。景気の低迷が長引く中、夫の収入も伸び悩み、少しでも家計の手助けになるように子どもがまだ小さいころからパートとして働き、パートが終わった後も家事や育児のほとんどをこなす...そんな日常を過ごす主婦がどれだけいるだろうか。著者は「昨今の主婦パートという雇用のあり方が、家族や社会に悪影響を与えかねない」と危惧し、それを「主婦パート・ショック」と称して、警鐘を鳴らしている。

本書は、そのような主婦パートの実態を、各種調査資料をはじめ、著者のこれまでの聞き取り調査などから描き出している。

まずは、主婦パート本来の姿とおかれた実態だ。主婦パートは、社会保険料負担との兼ね合いによって年収130万円を上限として就業調整をしながら、生活を維持するために働いており、決してお気楽な働き方ではないという。また、高学歴化が進行し、近年の主婦パートは社会的感覚や情報収集も長けていると指摘する（「第一章 主婦パートを誤解するな」）。厳しい就職環境を勝ち抜いてきた主婦パート、成果や業績を求められる時代をくぐり抜けてきた主婦パート、多様な社会的経験を積んできた主婦パート...そんな主婦パートが増加しているというのは事実だろう。

一方、主婦パートを雇用する企業側に目を向けると、主婦パートは派遣社員のような間接雇用ではなく、直接雇用であるがゆえに、企業からつけ込まれ「アリ地獄」状態になっていると指摘する（「第二章 主婦パートは“アリ地獄”」、「」は筆者、以下同様）。「第三章 “アリ地獄”型雇用は官民合作」では、仕事や働き方、賃金、労働時間など、企業が“アリ地獄”のように主婦パートに“つけ込む”姿が浮き彫りにされている。

さらに企業は「優秀な主婦パートをいかに育てるか、いかに確保するか、いかに増やすか」という点を追求し、主婦パートの「基幹化」を進めているという（「第四章 正社員並みの働き方を求める“基幹化”時代」）。主婦パートはもともと時間的な制約の大きい中で雇用されているにもかかわらず、サービス残業をさせられる。正社員と同じような仕事、働き方をしたとしても、主婦パートの賃金が上がるとは到底考えられない。均等待遇、同一労働同一賃金にはほど遠い実態が明らかにされている。

ちなみに、主婦パートの夫は、キャリア・ワイフや専業主婦の夫に比べて家事や育児に参加する時間が短い、という調査結果が示されているところは興味深い（「第五章 負担増加の家事・育児」）。妻がキャリア・ワイフであれば、夫も家事や育児に協力しようとするかもしれない。専業主婦であれば、夫は家事や育児を任せられると考えるかもしれない。その中間に位置する主婦パートの場合、夫は家事や育児に対してどのようなスタンスでいるのだろうか。女性だけの問題ではない。

著者は、「主婦パート・ショック」を回避するための処方箋として、「パートタイム社員」制度の導入と、その制度導入、運用に際して労働組合の重要性を指摘する（「第八章 “パートタイム社員”創設を」）。確かに晩婚化や晩産化、非婚化が進行したり、結婚や出産をしても働き続ける女性が増加したり、と環境も大きく変わっている。とはいえ、家事や子育てが両立できるような職場がどれだけあるのか。主婦パートにならざるを得ないというのが現状ではなからうか。フルタイム社員かパートタイム正社員、どちらの働き方を求めるのか。企業側にしてみれば景気の動向に伴う雇用調整弁となる層がなくなる、働く主婦側に見れば色々融通が利かなくなり、採用のハードルが高くなるのではないかと、といった双方の問題も潜んでいる。

このような現状は、将来の生活に対する不安の現れ、夫の収入が不安定になってきたということの現れではなからうか。主婦パートに限らず、働く者が深刻な状態におかれれば、それは企業、さらには家庭にまで大きく影響するに違いない。そんな不安や社会の歪みを解消し、将来のビジョンを描き出すのも労働組合の大きな役割、使命だと思われる（小倉 義和）。